

# 松江が生んだ画工と写真家

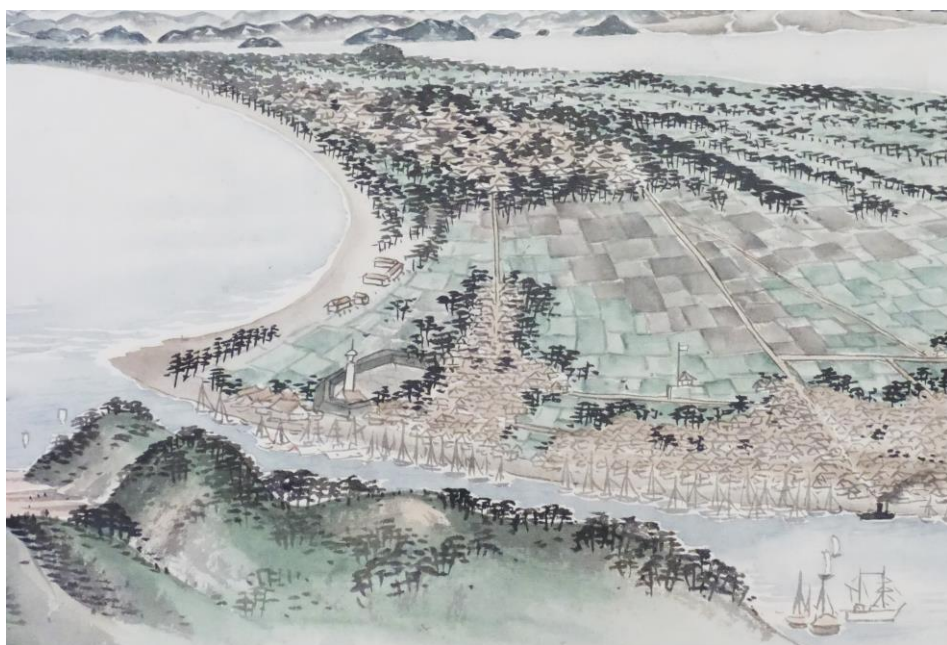
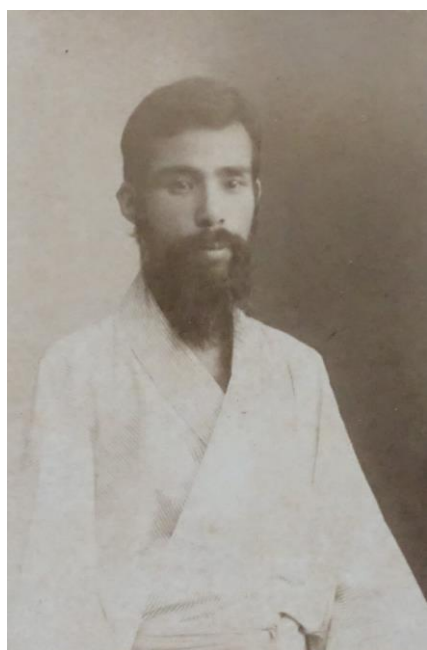
## ——堀櫟山・芙蓉・市郎の美術——

### 【後期】

明治維新後、松江藩士の家系から特異な3人の芸術家が生まれました。島根県で初めて美術学校を開いた堀櫟山<sup>ほりれきざん</sup>、その息子でアメリカ・ニューヨークにおいて写真家として成功した堀市郎<sup>いちろう</sup>、櫟山の弟で昭和初期の松江を描き、漢詩結社「剪淞吟社」<sup>せんしょうぎんしゃ</sup>を率いた堀芙蓉<sup>ふほう</sup>です。この3人の作品を一同に展示します。



初公開 美保関高尾山から見る昭和6～9年頃の境港 堀芙蓉筆 鷹尾坐嶺之展望 松平家献上本 松江歴史館蔵



堀芙蓉 38歳。大正3年(1914)8月15日、殿町の森田写真館で撮影

(堀昭夫氏蔵)

(上段全図、2段目は部分) 33.4×137.0cm

堀 芙蓉<sup>ふほう</sup> (亀五郎) 明治10年(1877)外中原に生まれる。櫟山<sup>れきざん</sup>の弟で、南画を下平龍邱<sup>しもだいらりゅうきゅう</sup>、油絵を石橋和訓<sup>かずのり</sup>に学ぶ。飯石郡役所、第二国立銀行、安田銀行に勤め、松江、隠岐西郷、境港、今市、鳥取、東京、大阪、倉吉へと転勤する。昭和6年(1931)夏に退職し55歳で松江に戻る。松江の漢詩結社「剪淞吟社」<sup>せんしょうぎんしゃ</sup>の編集を託された。同6年に大阪城の復興天守竣工時、天守に展示された蒲生氏郷<sup>がもうじさとがんせき</sup>葺石城奮戦図は秀逸である。同9年、内障眼に罹り視力が衰えた。同22年(1947)没。

堀 樸山 <sup>れきざん</sup> (宗太郎、久則)

安政3年(1856)城外中原に生まれる。祖父から日本画を学んだ。18歳で家督を継ぎ、明治16年小豆澤亮一に洋画を学んだ。翌年、第2回内国絵画共進会に出品し、12月、西茶町に島根県初の私立和洋画学校「方圓学舎」を開校したが翌年閉校する。師範学校・中学校の用務教員となるが、同20年に独立して「松江画工」として活躍する(31歳)。以後、第1回島根県私立教育会教育品展示会、第3回内国勸業博覧会、第1回島根県物産共進会などに出品する。同42年(1909)没。



(堀樸山肖像写真は佐野博史氏蔵)



初公開 樸山の細密銅板画

明治21年(1888)、有志により出雲・石見・隠岐の西南戦争戦死者を弔う記念碑が城山に建てられ、松江亀田城山招魂祭が開催された。城山に松江神社はまだなく(同32年建立)、負傷者人形が陳列され、外曲輪では相撲や射撃などが催された。記念碑は興雲閣建造の際に本丸天守前に移され、戦時中に金属供出により消失した。 堀樸山画 松江亀田城山招魂祭之図 銅板画 明治21年(1888) 松江歴史館蔵 27.2×38.8cm

堀 市郎 <sup>いちろう</sup>

樸山の長男で、明治12年(1879)外中原に生まれる。尋常小学校(現、内中原小学校)卒業後、殿町の森田写真館、東京の江木写真館で写真修行し、同34年渡米した。同39年ニューヨークに移り、大正元年(1912)マンハッタンに堀写真館を開業した。野口英世、東郷平八郎、新渡戸稲造、後藤新平、早川雪洲等を撮影し、その写真は『ニューヨークタイムス』やファッション雑誌『ヴォーグ』に掲載された。昭和4年(1929)に帰国し、横浜で画家となった。昭和44年(1969)没。



アジアで初めてノーベル文学賞を受賞したインドの詩人ラビンドラナート・タゴール 堀市郎撮影 1921-22

松江歴史館蔵



野口英世を何度もノーベル賞候補に推薦したアレクシー・カレル(ノーベル賞受賞者) 堀市郎撮影 1905-28

佐野博史氏蔵



堀市郎

ダゲレオタイプ発明百年祭写真功労者楯  
昭和12年(1937)7月、東京朝日新聞全関東写真連名とアサヒカメラ共同主催で「ダゲレオタイプ発明百年祭」が日比谷公会堂で開催された。市郎は日本写真界の各界に功労のあった者30名の1人として表彰された。裏面に「贈堀市郎殿/ダゲレオタイプ発明百年記念/昭和十二年/全関東写真連盟/アサヒカメラ」とある。  
佐野博史氏蔵(堀市郎肖像写真は佐々木寛子氏蔵)